

4 日本軍の司令部と一般兵士の持っていた情報と考え方

1. 日本軍・第32軍司令部の沖縄県民の見方 (※原文のカナ漢字文をひらがなにし、一部は分かりやすくした)

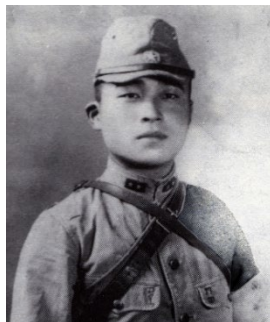
- (1) (沖縄県民は)「皇室国体に関する観念徹底していない」「進取の気性に乏しく、優柔不断、意志甚だ薄弱なり」「軍事思想に乏しく軍人となるを好まず」(1922 年沖縄連隊司令部)
- (2) 琉球文化を持つ沖縄県民に対して標準語励行の手段として沖縄各地の学校で「方言札」が用いられた
- (3) 「地方官民をして喜んで軍の作戦に寄与し、進んで郷土を防衛することを指導すべし」(1944 年 8 月 31 日牛島司令官訓示)
 - ⇒飛行場建設、陣地構築の作業への動員
 - ⇒第32軍約11万人(陸軍8万6000人、海軍1万人、防衛隊・学徒隊等1万4000人)の内沖縄県で徴集された軍人軍属＝正規兵、防衛隊、学徒隊等の合計は2万5000名 ※1944年12月に1師団(1万5000人位・軍隊の最も大きな単位)が台湾に抽出され兵力不足
- (4) 「軍人軍属を問わず標準語以外の使用を禁ず、沖縄語で談話をしたものは間諜(スパイ)とみなし処分する」(1945年4月9日 第32軍牛島司令官の命令) ※以上参考『沖縄県史各論第六卷沖縄戦』
- (5) 牛島司令官の米軍と沖縄県民への見方 (1944年12月)

「サイパンでは、在留日本人の多くが玉碎精神に従って軍と共に悲惨な最期を遂げた。しかし沖縄においては非戦闘員を同じ運命を ^{たど} らせるべきではない。アメリカ軍も文明国の軍隊である。よもやわが非戦闘員を虐殺するようなことはあるまい。もし島民を主戦場となるべき島の南部に留めておけば 剣電 ^{けんでん} 弾雨 ^{だんう} の間を 彷徨 ^{ほうこう} する 惨状 ^{さんじょう} を呈するに至るべく、しかも軍の作戦行動の足手まといになる」県民の北部疎開の決定の時の牛島司令官と八原高級参謀とのやり取りから『沖縄決戦』(八原博通著読売新聞社刊 p88)

2. 沖縄戦で戦った元日本軍兵士の話

^{こんどう} 近藤 ^{はじめ} 一さん(沖縄戦当時、階級は陸軍伍長)

1920年生まれ。三重県の兼業農家で育ち20歳で徴兵。中国現地で初年兵教育を受け、山西省で中国軍との戦闘を経験。1944年8月対馬丸で上海から沖縄・那覇港に着き、あまりに美しいところなので、天国に來たと感動した。首里戦線<読谷海岸から首里までの戦闘>で負傷し、回復したのち南部に撤退して、突撃をした時に転び米軍の捕虜となる。中国戦線、沖縄戦で日本軍が行ったことを正直に証言している。2021年5月101歳で亡なられた。参考『ある日本兵の二つの戦場—近藤一の終わらない戦争』(2005年社会評論社刊)(インタビューは、2004年2月8日)



②近藤一さん
写真=左 2004 年撮影 右=沖縄戦当時 25 歳

【小学生の時】

①校長先生が朝礼で、「中国人は、劣等国民だ。だから中国は乱れている。」と教えられた。

【兵隊になって中国に行く】

②中国人が外で食事をしているのと裸足で歩いているのを見て、なんて貧しいのかと思った。校長先生が言ったことがその通りだと思った。

③中国では、豚を飼うときに、人のウンチも食べさせていた。

【沖縄に移動】

- ④1944年8月那覇港に到着。中国から沖縄に着いた時、やっと日本に帰れたと思った。沖縄を守ろう。
- ⑤沖縄では、豚を便所(ウンチを食べさせている※)で飼っているのと裸足で歩いているのを見て中国と同じだと思った。※牛島註：沖縄の言葉で「フル」という石造りの囲いとアーチ形の屋根を持つトイレ兼豚小屋。同様に豚を飼う文化は、昔から中国、韓国の一部などにあった。

- ⑥1945年4月1日、自分の陣地の5km先で米軍の沖縄上陸が始まり、米軍の水陸両用車に驚いた。
 嘉数^{かかず}でのアメリカ軍が自分たちのいる陣地に正確に艦砲射撃を打ってくる。敵の音波探知機がいくら性能がよくても、おかしい。沖縄の人が懐中電灯で合図をして教えているに違いない。沖縄の人が信用できなかった。牛島註：米軍はグリッド・マップ(約183m四方の基盤の目)を用いて正確に目標地域を艦砲射撃を行った。
- ⑦日中戦争では、日本軍が中国の兵士や住民をボロ雑巾のように扱った。沖縄戦では、大本営や第32軍司令部は我々日本軍兵士をボロ雑巾のように捨てた。我々兵士は、住民を守る命令を受けていない。
- ⑧今思えば、そうした先入観や差別意識が、中国人を下に見てひどいことをし、沖縄戦での住民虐殺や略奪などにつながったと思う。

5 第32軍首里司令部壕の保続・公開に向けて②

1. 首里城と第32軍首里司令部壕の今

(1) 首里城正殿焼失と司令部壕保存公開の動き

首里司令部壕の坑道は、園比屋武御嶽石門・城西小学校側から首里城の西側の城壁のほぼ真下を南北に延び、現県立芸大金城キャンパスの三箇川^{さんかがわ}に降りる崖の途中まで続いていた。第1から第5までの坑口があった。坑口から延びる坑道は第1から第5坑道と名付けられていた。さらに地下壕には不可欠の換気口(立坑)が2本設置されていた。(⑩第32軍首里司令部壕平面図と航空写真⑪同断面図)

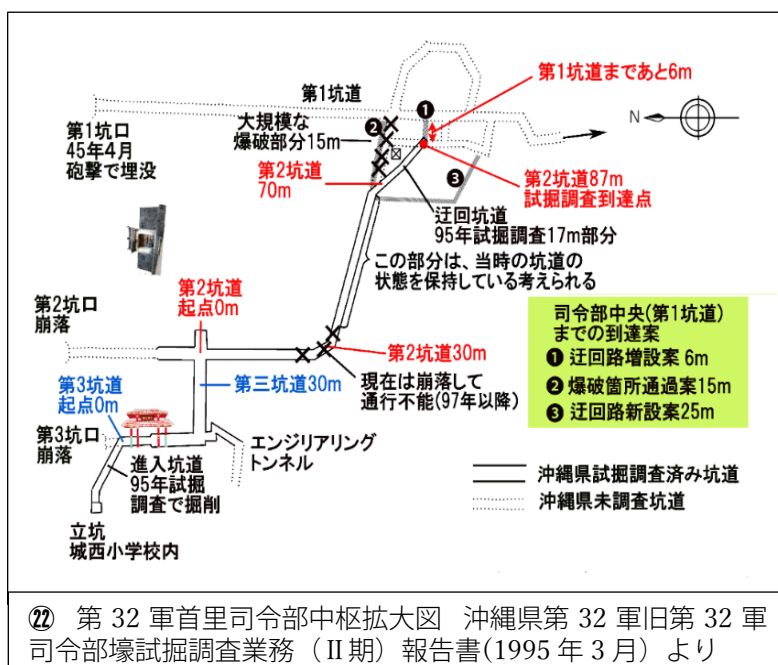
2019年10月31日未明の首里城焼失を契機に地下にある第32軍首里司令部壕(以下「司令部壕」とする)に注目が集まった。沖縄県はこれまで「公開は難しい」と事実上保存・公開に向けた取り組みを中止していたが、公開を求める声が広がった。翌2020年6月には「第32軍司令部壕の保存・公開を求める会」が発足した。那覇市の市民や大田昌秀県政時代の元県知事公室長高山朝光氏など多くの県民が参加し、元県第32軍司令部壕保存・公開検討委員会委員長だった瀬名波榮喜氏(元名桜大学学長)を会長に選出し、運動を進めてきている。【求める会連絡先】email:32shuri@gmail.com tel.080-6492-6594

2021年1月22日、沖縄県は新たに「第32軍司令部壕保存・公開検討委員会」を設置して、公開へ向けた第一歩を踏み出した。1997年沖縄県が司令部壕公開を宣言してから、実に24年ぶりに埋もれたままになっていた地下司令部の戦争遺跡にもスポットが当てられることになる。

(2) あと6mに迫っていた——開示された93・94年度沖縄県試掘報告書

①司令部中央の第1坑道まであと6mに迫る

沖縄県は、戦後50年平和事業の一環として1993年から、司令部壕の保存・公開に向けて本格的な試掘調査に着手した。沖縄県に開示請求して入手した。「旧第32軍司令部壕試掘調査業務(Ⅱ期)報告書」(日本工営福岡支店)(以下「Ⅱ期報告書」と略)によれば、これまで不明だと思われていた司令部壕中枢部分の様子が報告されていた。27年前の95年3月の時点で、司令部壕の第1坑道まであと6mまでに迫っていたことが分かった。Ⅱ期報告書には「鉄筋や支保材が出土しており、付近が司令部中央部であることには間違いない」と記述され、「司令部中央枝坑との接合部。正面上部に鉄筋が出土」と解説付きの写真が添えられていた(⑫「第32軍首里司令部中枢拡大図」)。



②第2坑道奥の区域は、保存状態は良かった

私が1997年8月に、県の立会いで入坑した際に、落盤で通過できずに見ることができなかった第2坑道の奥の部分の様子をⅡ期報告書は、明らかにしていた。初めて公開された試掘調査前の写真では、比較的坑道は安定していた。左右には沖縄戦当時の木製の坑木（支保工）が途中で折れ、一定間隔で立っていた。天井も壁には掘削時のノミ跡が残っていて、四角く掘られたままの状態になっている（㉓）。



㉓ 第2坑道の測点No.5～No.6付近。坑道は当時のまま残る。両側には支保工が整然と残る。

③第4坑口

第4坑口は金城町の私有地にあり、民家が建っていて坑口の様子を観ることはできない。

第32軍高級参謀・八原博通氏は、「我々にささやかな自由を与えてくれた場所は第4坑道の出口であった。ここは巨岩が懸崖状に出口を掩い、空中に対してはもちろん、東、北、西の三方向に対しても、遮蔽掩護が利いた。僅か3坪大の地域であるが安全な上に、正午過ぎからは日光浴もできる。牛島將軍も始め誰も彼も、暇を見てはここに落ち合った。万雷の如き爆声もすっかり馴れっこになって、のんびり世間話をする一時は実に心楽しいものであった」（『沖縄決戦』p182）と述べている。

④第5坑口・第5坑道

現在、唯一坑道に直接つながる坑口があるのは第5坑口である。（㉔）。しかし、これも沖縄戦当時の物でなく、93年の沖縄県の試掘調査の際に作られたものである（㉕）。

1992年、琉球新報の小那覇安剛記者（現編集委員）が同僚記者と2人で第5坑口を探していると横長の穴を見つけ、入るとすとんと滑り落ちた。

琉球新報「首里城地下の沖縄戦5」（92年6月21日）は、当時の状況を知る元学徒隊の証言を伝えている。（※新聞記事内の年齢は、発行当時の年齢である）

『「ほぼ間違いではないです。このあたりです」、沖縄師範の鉄血勤皇隊として野戦築城隊に配属された渡久山朝章さん（63歳）は今年5月、壕掘りに当たった金城町側の坑道口付近を探し当てた。47年ぶりに訪れた場所は県立芸大（元琉大女子寮）の南東斜面。ガジュマルの根が岩石を抱き、雑木がうっそうと茂っている。「兵隊がつるはしで掘り進むと、私たち学生がシャベルで土をすくってトロッコに積み込み、洞くつの外に捨てたんです。坑道内は天井などから流れ落ちた水で足首がつかれるほどだった。足はふやけるし、ずぶぬれになるし、おまけに坑道内は蒸し暑く、兵隊もふんどし姿で作業していた』



㉔ 現在の第5坑口（2021年4月30日撮影）



㉕ 第5坑口試掘調査後 日本工営旧第32軍司令部壕試掘調査・工事写真（1994年2月～4月）沖縄県女性力・平和推進課提供

第5坑道は、北（木曳門側）に向かって約150m直線で伸びている。戦後、人が入ったりして当時とはずいぶん変わっているようである。私が、97年に入坑した時はきれいに片付けられ、整理されていた。坑道の断面は、横幅、高さとも約2mで内部は、鉄骨やパネルで補強されていた（㉖）。わずかな勾配（3%）があり、当時と同じように絶え間なく、北側の第1坑道側から湧水が床面を流れていた。坑内

の湿度は 100%で、前述の渡久山 朝章さんの蒸し暑かったとの証言通りであった。琉球石灰岩は多くの気孔を含んでおり大量の地下水を浸透させる性質がある。第 5 坑道が、坑口から 70~80m 地点で琉球石灰岩の層と島尻泥岩層の境目を掘り抜いたために、天井からの湧水に悩まされることになる。

米軍が注目したのは、坑口から 25m の地点にある kitchen を炊事場の役目だけでなく、この場所で日本軍が機密書類を焼却したことであった。94 年試掘調査では崩落の危険があり奥の調査は行っていない。

坑道内の遺品について、報告書は以下の様に記録していた。

《試掘前の調査では 60m 付近までに軍靴、空ビンは数個確認されていたが、戦後にその多くは付近住民により持ち出されており、坑内には目視できる物は全くみられない状態であった。94 年の発掘調査の際に 60m 付近までは、20 cm 程度床面下に埋もれ



②⑥ 試掘調査工事後の第 5 坑道内部と出土した遺品（1997 年 8 月）



②⑦ 通信用ケーブルと電気スタンドが出土（1994 年度 4 月試掘報告書より）



②⑧ 小銃 7 丁、製図用具、刀、軍靴が出土（1994 年度 4 月試掘報告書より）

ていた軍靴、空ビン、茶器、銃弾を掘り出し、現在一部は平和祈念資料館に展示・保管してある。41m 付近より手りゅう弾が発見された。ほぼ埋まった状況の 60m 付近から次第に出土品が多く出始め、61m 付近より坑内において最初の小銃が発見され、弁当箱、機器部品、銃弾、軍靴、茶器等順次発見された。スコップ、ツルハシ各 1 丁及び三本鋏 2 丁は、70m~73m 付近から出土した。72m 付近では通信用ケーブルと電気スタンドが出現した（②⑦）。83m 付近からは当時の支保丸太、レール、小銃 7 丁（まとめて出土）製図道具等が床面より出土した。（②⑧）。

2.第 32 軍首里司令部壕の保存・公開に向けた経過

(I)前史、司令部壕公開の 3 度の試み

日本軍としての沖縄戦が終結は、1945 年 9 月 7 日、米軍の嘉手納基地での降伏調印により第 32 軍としてようやく戦闘が中止されることになった。住民にとっての戦後は、個々人が米軍の捕虜となった日ではじまる。破壊された首里司令部壕は戦後、司令部壕はどのような「運命」をたどったのか。これまでの司令部壕の公開に向けての試みは 3 回あった。

①1962 年、那覇市

戦後 1 回目は、那覇市による 1962 年観光資源開発のための復元工事であった。92 年 7 月 6 日付琉球新報は、「那覇市が 1962 年から 63 年にかけて、観光資源開発のための壕復元を検討し、その調査・復元工事に着手していたことが、当時の工事関係者の証言で明らかになった。」と報じている。

②1968年、沖縄観光開発事業団——実測していない実測図

2 回目は 1968 年 6 月、現沖縄観光コンベンションビューローの前身、沖縄観光開発事業団が「戦跡である首里軍司令部壕を観光資源として開発するために可能性を探索し技術的に解明すること」を目的として調査を行った。

この同開発事業団調査は、総合土木コンサルタンツが受注し、東光コンサルタンツ(東京都中野区)に技術指導を得て「首里司令部壕開発調査報告書」としてまとめられた。写真、地図を含め 25 ページで、調査期間は 4 月 30 日から 6 月 30 日までであった。

軍司令部壕附近実測図には、「司令部壕坑道図は記憶図により推定して記入してある」と明記している。

報告書では「計画に基づき調査いたしました結果、開発可能であることが解明されましたので」(p 1)と結論づけたが、沖縄観光開発事業団は公開については、予算面から断念した。

しかし、実測していない「軍司令部壕附近実測図」は、第 1 坑口が 2 つに分かれている等不正確で、最近まで新聞の記事などにも引用され誤解を広げた。首里司令部壕にかかわる証言については、坑口および坑道の番号だけでなく、周囲の状況を含めて、注意をして聞き取る必要がある。

③1993～1997年、沖縄県

そして、3 回目は、1993 年度から 94 年度に沖縄県が本腰を入れて行った試掘調査と 97 年「公開基本計画」である。調査は、94 年 1 月から 95 年 3 月まで、3 回に分けて行われている。

(2)2021 年沖縄県が新検討委員会を設置

2021 年 1 月 22 日、玉城デニー県政は、第 32 軍司令部壕保存・公開検討委員会（玉城辰彦委員長）を発足させた。沖縄県のホームページ→教育・文化・交流→平和→第 32 軍司令部壕事業と検索すると、検討委員会に配布された貴重な司令部壕内部の写真を含む 93 年以降の県の調査の資料を、誰でも見ることができるようになった。第 2 回の検討委員会は、3 月 29 日に開かれた。さらに第 5 坑道は 1 月 22 日、第 2・3 坑道は 3 月 17 日、26 日に検討委員会のメンバーによる視察が行われた。5 月 11 日には、沖縄陸軍病院南風原壕群及び旧海軍司令部壕の視察が行われた。

第 3 回の検討委員会は 7 月 20 日、第 4 回は 12 月 27 日に開催され現在に至っている。

第 3 回までの議事概要な提出された資料は、沖縄県の HP で見ることができる。

<https://www.pref.okinawa.jp/site/kodomo/heiwadanjo/heiwa/32gghozonkentouiinkai.html>

3.第 32 軍首里司令部壕の保存・公開・活用の意義——過去の沖縄戦と過ちを学ぶ場として

今さら、何で 77 年間も埋もれ、崩落しつつある司令部壕を掘りだす必要があるのか？

今、生存している私たちのほとんどは沖縄戦当時、子どもであったか戦後生まれで、77 年前の戦争の当事者ではない。しかし、戦争の歴史に戦後の日本社会がどう向き合ってきたのかという点では、私たち自身も当事者である。国内で最大で最後の地上戦であった沖縄戦に向き合うためにも司令部壕が埋もれたままでよいのだろうか。沖縄戦の無残な事実を掘り起こし、後世に伝える責任は、私も含む戦後世代の私たちにあると思う。

第 32 軍首里司令部壕は、その

全国の司令部壕跡(坑道の長い順)				
名称と公開等状況	坑道全長	機能	備考	使用
松代大本営 (長野県長野市) 保存・公開(一部)	約10,000m	大本営 天皇住居 政府機関、 日本放送協会、 中央電話局他	1944年11月 象山、舞鶴山、 皆神山	未使用
日吉台海軍司令部 地下壕 (神奈川県横浜市) 保存・公開(一部)	約2,600m	連合艦隊司令部、 海軍省人事局・ 航空本部他	1944年6月 以降工事開始	使用
津嘉山司令部壕 (沖縄県南風原町) 調査(一部)・未公開	約2,000m	第32軍司令部壕	1944年9月 工事開始	経理部他として 沖縄戦で使用
首里司令部壕 (沖縄県那覇市) 調査(一部)・未公開	約1,050m	第32軍司令部壕	1944年12月 工事開始	沖縄戦で 使用
②9 全国の主な旧日本軍司令部壕跡				

規模から長野県にある^{まつしほ}松代大本営、神奈川県日吉にある海軍連合艦隊司令部地下壕、沖縄県津嘉山^{つかざん}司令部壕に次ぐ4番目の地下司令部壕である(29)。その規模からは4番目とはいえ、実戦に使用し、国内最大で最後の地上戦を指揮した司令部壕という観点からは、戦争遺跡の中でも重要なものであり、戦争と平和を学ぶ重要な場、施設となるものだと考える。

神奈川県川崎市にある明治大学^{いぐた}生田キャンパスの敷地内には、戦跡そのものを学習・展示の場に行っている同大学平和教育登戸研究所資料館がある。戦時中に近代戦の一つの側面であった「秘密戦争兵器」の開発を行っていた^{のぼりと}登戸(第九陸軍技術)研究所があった。生物化学兵器(毒ガス)、細菌兵器、電波兵器、風船爆弾、中国紙幣のニセ札づくり等の施設の一部分が戦跡とし保存され、展示されている。

琉球新報「32軍壕を読み解く〈2〉一米軍報告書から」は、明治大学の山田朗教授(日本近現代史)の提案を紹介している。

《「戦後、だいたい司令部があった場所は破壊されたりして、実態を示す史料を残さない」と指摘した上で、司令部壕保存・公開の意義について「国内最大の戦闘を指揮していた場所を今日の目から見直すのはすごく大事なこと」と話す。授業で「この場所で戦争の研究が行われ、中国で捕虜の人体実験もしていた、と(学生が)聞くと、教科書の中の出来事でなくなり、自分も歴史の流れの中にいるのだ、ということに気がつくことができる」と手応えを話す。一方、沖縄では「数ある南部戦跡はあっても司令部の在り方と結びつけて語られていない」とし、「司令部壕がきちんと保存・活用されると、沖縄戦の全体像がより伝わりやすくなるのではないかと提案する。》(2021年3月18日)

日本は明治維新以降、「富国強兵」をスローガンに欧米列強に追いつこうと、朝鮮半島、中国大陸、東南アジアへと資源と覇権を求め侵略戦争を繰り返した。そうした戦争の結末として迎えるのが、国内で最大で最後の地上戦、沖縄戦であった。日本の人々が普通に生活を営む場が戦場となり、沖縄県の住民は目の前で日本軍と外国軍の戦闘の真ただ中に放り込まれ、非武装の住民が初めて目撃する戦争であった。他の都道府県の住民にはない戦争体験であった。それは、軍隊とは何か、国民と軍隊との関係を歴史的な事実をもって示したものであった。

77年前、沖縄の住民が身をもって紡ぎ出した教訓「軍隊は住民を守らない」「命^{スチ} どう宝=命こそ宝」は、日本の私たちだけでなく、東アジアの未来の平和を築くための大切なメッセージとなるであろう。日本がかつての戦争、自国内での地上戦で起きたことをどうとらえているかを、東アジアの人たちに発信することも、未来のアジア諸国との平和と共存につながると考える。

そして、首里司令部壕を過去の戦争と過ちを具体的に学ぶ場として整備することは、世界に通じる歴史認識と人権意識を獲得するための私たちの責務だと考える。

私の祖父である第32軍牛島満司令官は首里の司令部壕で降伏せず、無謀な本島南部に撤退する作戦を選んだ。この結果、日本軍、米軍、住民の三者が混在する戦場が発生し、多くの住民が戦闘に巻き込まれ、犠牲者は大幅に膨らんだ。極限状態に陥った兵士が壕から住民を追い出したり、殺害したりすることも起きた。沖縄戦で語り継がれる悲劇が南部撤退によって凝縮して発生した。

特に「南部撤退」の作戦命令を起案、論議、決着した場所が首里の司令部壕である。地下に埋もれたまま、現在のように「保存」だけされていたのでは意味はない。調査、公開・活用されて初めて戦争遺跡としての価値をもつ。その第32軍司令部壕の全容解明のためには、首里の地下に埋もれている坑道跡と、米国の公文書館の棚にある史料の調査が不可欠である。そのような沖縄戦について学ぶ場の実現に向けて協力したいと思っている。(うしじま さだみつ)

※本稿は、拙著『首里城地下 第32首里司令部壕～その保存・公開・活用』(高文研)のⅢ、Ⅳ章を抜粋・修正したものである。

<https://www.koubunken.co.jp/book/b595239.html>

